

以善会レポート

大田南畝のみた掛川

和田 厚

二十年程前に何気なく買った『大田南畝全集』全二十一巻（岩波書店）を最近になって読んでいるのですが、これが非常に面白い。その中に、南畝が掛川城下町の文化を高く評価しているくだりがあるのでここに紹介します。山崎家は四代目晨園の時代であり、晨園の文化活動の背景を知る上で参考になることと思います。

大田南畝は寛延二年（一七四九）、江戸生まれ。狂歌師、漢詩人として有名ですが幕府の官僚でもありました。

その南畝の紀行文に掛川が登場するのは、享和元年（一八〇一）三月三日、大坂銅座への赴任の際の「改元紀行」、及び文化二年（一八〇五）十一月十二日、赴任先の長崎奉行所よりの帰途の「小春紀行」の二回です。

その際、当時一流の文化人である南畝は掛川をどのように見ていたのでしょうか。

まず、享和元年の記述をみてみましょう。

「掛川の城にいれば、家ごとに葛布うるもの多し。此城いにしへ今川氏真のこもれる城也とぞ。今の執政太田備中守殿の城なり。大手の門を右にみつゝゆくに鷗鳴（ママ）などもみゆ。折から巳の時の鼓なる音に、われ寛延二年己巳上巳の日巳の時に生まれしと、母つねに物語し給ふ事思ひ出るに、けふなん遠き処に来にけると思ふにも、父母のいませし時のことまづしのぼる。城下の町もつきづきし。ある見世先に三体詩の古き本あるをみる。これまで小田原・駿府の城下をもへしかど、書物ひさぐいえをみず。

海道はじめての奇観なるべし。左に小笠原山道（ママ）あり。十九首といえる立場ありときゝしがまことにや。……」

現代文に直すと次のようになります。

「掛川城下に入ると多くの家で葛布を売っている。この掛川城は昔、今川氏真が籠城した城という。今の老中太田備中守資愛殿の城である。大手門を右に見ながら行くとシャチホコなども見える。ちょうど、巳の刻（午前九時〜十一時）を告げる太鼓の音が聞こえ、私が寛延二年つちのとみ、桃の節句の巳の刻に生まれたと母がつねに語ってくれた事を思い出し、今日こんなに遠い処に来てしまったと思いつつ、父母が存命だった時のことがしのばれる。城下の町も落ち着きがある。ある店先に三体詩の古い本があるのをみた。これまで小田原や駿府の城下を通ってきたが、書物売る店は見なかった。東海道ではじめての珍しい風景である。左に小笠山に向かう道がある。十九首という所には旅人などが休息するための場所があると聞いていたが本当だろうか。……」

ここで興味深いのは小田原や駿府のような大きな城下町でも書物売る店は見なかったが掛川にはそれがあつたということ、またその店先に三体詩の古い本が売られていたということです。ちなみに広辞苑によれば三体詩とは、「唐代の詩人一六七人の作を、七言絶句、七言律、五言律の三体に分けて編纂した書」とあります。漢詩人であり当時一流の文化人であつた南畝は、江戸から遠くはなれた小さな城下町でそれを見てさぞ驚いたことでしょう。

さて、この享和元年という年は掛川そして山崎家にとってどのような年だったのでしょうか。この年、山崎家四代目万右衛門が主人の心掛けをはじめ、商売の心得などを細かく定めた「遺家訓」を制定しています。

また、江戸後期の儒学者の第一人者として知られる林述斎の高弟である松崎慊堂は、翌享和二年に掛川藩江戸屋敷に開かれる藩校の教授として招かれます。また同四年には掛川にも北門書院とよばれる藩校が開かれます。こうしたことから享和元年という年は掛川において学問の気運が高まりつつあつた年だったといえるのではないのでしょうか。

次に南畝が掛川を通過するのは文化二年（一八〇五）十一月十二日のことですが南畝は次のように書いています。

「掛川の宿にいれば十九首町、下俣町、西町、分中王町（ママ）などいえる札かきて、町々の柱におしたり。江戸の城下の町の名をかけるにならへるなるべし。城門（木戸）に入れば西町、中町、連着町（ママ）二敷町（ママ）、塩町、木戸を出て新町あり。」

ここでは町名の表示法が江戸にならっているようだと述べています。

このことは掛川の町が他の城下町、宿場町に先駆けて江戸の文化を取り入れていたことを物語るものではないでしょうか。

それでは、この文化二年（一八〇五）は掛川にとってどのような年だったのでしょうか。この年二月、藩主太田資愛が死去し、資順が藩主となります。またこの年、江戸藩校の教授である松崎慊堂が初めて掛川を訪れます。そして慊堂は山崎家四代目万右衛門と接点を持つことになり、翌文化三年には「晨園記」を著し、四代目万右衛門は号を晨園と名のる事になります。

以上のように大田南畝が見た享和、文化時代の掛川は、私たちが考えているよりかなり文化的な町であったと思われるます。

さて、大田南畝ですが幕臣として順調に出世したわけではなく、一時は田沼意次の腹心で、横領の罪で斬首された勘定組頭土山宗次郎から経済的援助を受けていたことから、かなり危ない立場に陥ったと言われています。

これは私見ですが、そうした危機を回避できたのは南畝の文化人としての交友関係の広さが一因にあると思われるます。その範囲は作家、画家にとどまらず大名まで広がっていました。一例を挙げますと、南畝が文化八年二月から九年十月にかけて詠んだ歌を集めた「放歌集」によると、横須賀城主のもとで山寿という額を見て「いく千代も動かぬ山の寿や遠つあふみにつづく櫛松」と詠んでいます。いう歌が載っています。ちなみに「櫛松」は藩主西尾家の家紋です。

このように江戸の文化人のみならず大名にまでその才能を愛された南畝ですが、息子の定吉が支配勘定見習いとして召し出されるものの、病で失

職したため、隠居を諦めて働きつづけました。そして文政六年（一八二三）
登城の際の転倒が元となり七十五歳で死去しました。

「辞世の歌は「今までは人のことだと思ふたに俺が死ぬとはこいつはたま
らん」とも「生きすぎて七十五年食ひつぶしかぎり知られぬ天地の恩」と
もいわれています。